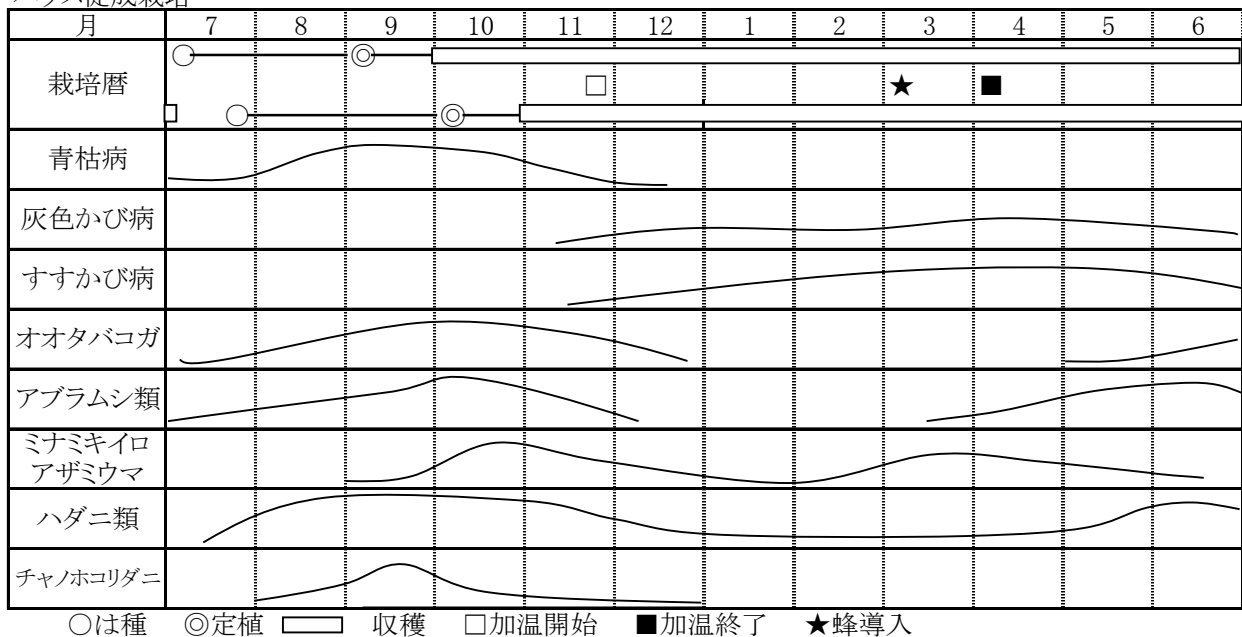


(10) ナス

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

ハウス促成栽培



2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

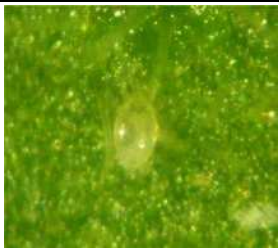
なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
青枯病 (細菌)	①排水を良好にする。 ②発病株を早期に発見し除去する。 ③整枝などの作業で感染することもあるので、ハサミを消毒する。 ④トナシム、トルバム・ビガー、台太郎など耐病性台木に接ぎ木する。 ⑤台木の地際から7～10cm程度の高位置で接ぎ木する。高接ぎにすることで発病抑制効果が高まる。 【参考事項】 病原細菌は多種類の作物を侵し、複数年土壌で生存できる。 高温で発生しやすい。  ナス青枯病
苗立枯病 (<i>Rhizoctonia</i>)	①前作で発病のあった育苗土などは交換する。 ②排水を良好にして過湿を避ける。 ③発病か所を早期に発見し除去する。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
半身萎凋病 (<i>Verticillium</i>)	①発病株を早期に発見し除去する。 ②トナシム、トルバム・ビガー、茄の力など耐病性台木に接ぎ木する。 ③夏の高温期に施設を密閉し、太陽熱処理を行う。 【参考事項】 本病原菌は多犯性で、ナスのほかトマト、イチゴ、ハクサイ、ダイコン、カブ、フキ、ウド、オクラ、キクなどを侵す（ただし、寄生性の分化あり）。 生育適温は22～26℃である。	 ナス半身萎凋病
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	①多湿を避ける。 ②開花後の花弁、枯葉、発病葉を除去する。 ③密植を避け、換気を良好にする。 ④ほ場全面にポリマルチを敷く。 ⑤夏の高温期に太陽熱利用による土壌消毒やハウス蒸込みにより被害残さ中の病原菌や菌核を死滅させる。 【参考事項】 20℃前後の比較的低温時に多湿条件が続くと多発する。	 ナス灰色かび病
菌核病 (<i>Sclerotinia</i>)	①低温多湿を避ける。 ②ポリマルチを敷く。 ③菌核が形成される前に、発病株又は発病部を早期除去する（次作の対策）。 ④夏の高温期に施設を密閉し、太陽熱処理を行う。 【参考事項】 多犯性でほとんどすべての野菜を侵し、菌核→子のう盤→子のう胞子→菌糸→菌核の生活サイクルをくり返す。 生育適温は、20℃前後である。	
黒枯病 (<i>Corynespora</i>)	①多湿を避ける。 ②密植を避け、過繁茂とならないようにし、換気を良好にする。 ③発病葉を早期に発見し除去する。 ④苗床で発生させないように管理する。 【参考事項】 主に施設栽培で発生し、20～28℃の多湿条件下で多発する。	
すすかび病 (<i>Mycovellosiella</i>)	①多湿を避ける。 ②密植を避け、過繁茂とならないようにし、通気を良好にする。 ③発病葉を早期に発見し除去する。 ④収穫後は、植物残さを集めて処分する。施設を密閉して高温処理を行い、病原菌を死滅させる。 【参考事項】 主に施設栽培で発生し、25℃前後の多湿条件下で多発する。	 ナスすすかび病

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
すす斑病 (<i>Pseudocercospora</i>)	①多湿を避ける。 ②密植を避け、過繁茂とならないようにし、通気を良好にする。 ③発病葉を早期に発見し除去する。 【参考事項】 病徴は、すすかび病と酷似するため、正確に区別するには葉裏にできたカビ（孢子）を顕微鏡で調べる必要がある。 高温、多湿条件で発生しやすく、10～12月、3～6月に発生することが多い。 トマトすすかび病と同じ病原菌で、トマト、ナス相互に病原性を有する。  ナスすす斑病
アザミウマ類	①施設周辺の雑草を除草し、密度を下げる。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いの赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ③発生施設では収穫終了後に施設を密閉し、高温にして殺虫し、外部への飛散を防止する。 【参考事項】 ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが主要種で、特に前者は萼内側で果実を加害し傷果を生じさせるので被害が大きい。 卵は植物組織内、前蛹と蛹は土中にいるため、葉、花、果実上に見られるのは幼虫と成虫である。 施設栽培で天敵製剤を利用する場合は、天敵が定着できるよう長期間悪影響を及ぼす農薬は使用しない。
コナジラミ類	①施設周辺の雑草を除草し密度を下げる。 ②施設栽培では隔離したハウスで育苗し、虫の寄生した苗を定植しないようにする。 ③施設の開口部に目合い0.4mmの防虫ネットを張り、侵入を防止する。 ④発生施設では収穫終了後に施設を密閉し、高温にして殺虫する。 【参考事項】 オンシツコナジラミとタバココナジラミが寄生し、排泄物によりすす病が発生する。 施設栽培で天敵製剤を利用する場合は、天敵が定着できるよう長期間悪影響を及ぼす農薬は使用しない。 タバココナジラミは薬剤感受性などが異なるバイオタイプが存在し、遺伝子診断で識別可能である。
アブラムシ類	①露地栽培では畝面全体をシルバーフィルムで被覆する。 ②施設栽培では隔離したハウスで育苗し、虫が寄生した苗を定植しないようにする。 ③ほ場内外の雑草を除去する。 ④施設の開口部に目合い1mmの防虫ネットを張り、侵入を防止する。 【参考事項】 ワタアブラムシとモモアカアブラムシが主な発生種で、薬剤抵抗性個体群もあり、多発生後では防除が困難なので、発生初期の防除に重点を置く。 施設栽培では、苗からの持込みと開口部からの侵入により、冬期間も増殖する。 露地栽培や雨よけ栽培では、アブラバチ、テントウムシ類やクサカゲロウ類など有力な天敵が多数存在し、密度抑制するので、天敵に長期間悪影響を及ぼす農薬の散布はなるべく控える。また、施設栽培で天敵を利用する場合も、天敵が定着できるよう長期間悪影響を及ぼす農薬は使用しない。
ハスモンヨトウ、オオタバコガ	①目合い4mm以下の防虫ネットを設置する。 ②被害果などは除去し処分する。 【参考事項】 オオタバコガは果実への食入前に防除を行う。
ハダニ類	①施設周囲の雑草はハダニ類の発生源となるので除草する。 【参考事項】 ナミハダニとカンザワハダニが主要種である。 両種とも野菜、花き、果樹、雑草などほとんどの植物に寄生する。 20～28℃が発生適温で、乾燥を好む。 移動、分散は歩行及び風による。 露地栽培や雨よけ栽培では、カブリダニ類など有力な天敵が存在し、密度抑制するので、天敵に長期間悪影響を及ぼす農薬の散布はなるべく控える。また、施設栽培で天敵を利用する場合も、天敵が定着できるよう長期間悪影響を及ぼす農薬は使用しない。

病虫害名 (病原体)	農薬によらない防除	
チャノホコリダニ	①施設栽培では隔離した施設で育苗し、虫の寄生した苗を定植しないようにする。 ②施設周囲の雑草を除草する。	
	【参考事項】 本種は微小なため、肉眼での確認は困難である。 生長点部の芯止まりに注意し、初期の防除を徹底する。	 チャノホコリダニ
センチュウ類 (ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタラリア スペクタビリス、マリーゴールドなどが有効 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールドなどが有効 ②太陽熱消毒を行う（土壌病虫害の防除法の項参照）。 ③有機物を施用する。	
	【参考事項】 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントなので、十分な栽培期間を確保する。 また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。	